

# かいじん二十めんそう

江戸川乱歩

青空文庫



## 1

ある日、しようねんたんていだんのぼけつと小ぞう<sup>こ</sup>は、ひとりで、さびしいのはらをあ  
るいていました。

ぼけつと小ぞうは、小がっこう四ねんせいですが、ようちえんのせいとみたいにからだ  
が小さく<sup>ちい</sup>くて、ぼけつとにでもはいりそうだというので、こんなあだながついているのです。  
のはらには、はやしがあつて、そのむこうに、りっぱなようかんがたっていました。

大きな三がいだてのいえです。

ぼけつと小ぞうは、そのようかんが、あまりへんなかつこうをしているので、そばまで  
いってみました。このへんにはいえがなく、このようかんだけが、ぼつんとたっているの  
です。

その、れんがのへいのそとをあるいていると、どこからか、「きやあ」というさけびご  
えがきこえてきました。

びつくりして、あたりをみまわすと、ようかんの三がいのまどが、一つだけあいていま

す。

十とおぐらいの女の子が、そこからからだをのりだすようにして、たすけをもとめていました。ほけつと小ぞうは、すぐ、ほけつとから小がたのぼうえんきようをとりだして、目にあてました。

この小さいぼうえんきようは、しょうねんたんでいだんの七つどうぐの一つで、いつでももちあるいているのです。ぼうえんきようの中に、女の子のかおが、大きくうつりました。そのかおが、とてもこわそうに、目をいっばいにひらいて、たすけをもとめているのです。

そのとき、ぼうえんきようの中の女の子のうしろに、大きな、きみのわるいものが、ぼんやりとうつりました。

あつ、らいおんです。たてがみのある、大きならいおんが、いまにも、女の子にとびつきそうにしているのです。

「きやあ」

また、ひめいがきこえました。

ほけつと小ぞうは、いきなりかけだしました。そして、ちかくのこうばんをさがして、

そのことをしませたのです。

おまわりさんは、びっくりして、ふたりづれで、そのようかんにかけつけました。

げんかんのべるをおすと、中から、白いあごひげのあるおじいさんがでてきました。

「わしは、このいえのしゅじんだが、うちには、そんな女の子はいない。まして、らいおんなど、いるはずがない。その子どもは、ゆめでもみたんだらう。はははは」とわらいとばすのでした。

おまわりさんは、しかたがないので、そのままひきあげてしまいました。

けれど、ぼけつと小ぞうは、どうしてもあきらめることができません。よるになるまで、ようかんのまわりをあちこちあるきながら、もう一ど女の子のかおがみえないかと、まぢかまえていました。でも、あのまどは、もうしまっていて、しいんとしています。

よるになると、ぼけつと小ぞうは、もんの中へしのびこみました。

ぼけつと小ぞうは、こつそりと、ようかんのよこへまわっていききました。

すると、一かいの一つのまどに、あかりがついています。のぞいてみると、そこに、さっきの女の子がいるではありませんか。

女の子は、くろいきれで目かくしをされ、さるぐつわをはめられています。そのそばに、

くろめがねのわかいおとこが、こわいかおをして、たっていました。

そのとき、もんのそとに、じどうしゃのとまるおどがしました。ぽけつと小ぞうは、「あつ、きつとそうだ」

とうなずきました。

足おとのしないようになげだして、もんのそとへでてみると、大がたのじどうしゃがとまっていました。

じどうしゃのうしろの、にもつをいれるとらんくのふたがうまくひらきました。ぽけつと小ぞうは、いきなり、その中へもぐりこんで、もとのとおりにふたをしめました。

まもなく、くろめがねのおとこが、女の子をつれて、じどうしゃにのると、そのまま、どこかへはしりだしました。

あの女の子は、いったいだれなのでしょう。ひるまみたのは、ほんとうのらいおんだつたのでしょうか。そして、とらんくにかくれたぽけつと小ぞうは、これからなにをするのでしょうか。

あるばんのことです。くろいめがねをかけたおとこが、かわいらしい女の子をじどうしやにのせて、どこかへつれていくのです。しようねんたんでいだんのぽけつと小ぞうは、じどうしゃのうしろのとらんくの中にかくれました。

じどうしゃは、さびしいはらっぱでとまりました。

くろめがねは、女の子の手をひいて、くるまからおりました。あたりはまつくらです。大きな木の下に、ひとりのおとこがはこをもつてたっていました。

「やくそくのほうせきは、もつてきたか」

くろめがねがきくと、おとこがうなずきました。くろめがねは、つれていた女の子と、おとこのもつていたはこをとつかえつこしました。ぽけつと小ぞうは、とらんくのふたをすこしひらいて、みていました。

「ははあ、わかつたぞ。ほうせきぼこと、女の子をとつかえたんだな。よしつ、ぼくは、きつと、ほうせきぼこをとつかえしてやるぞっ」

くろめがねは、ほうせきぼこをもつて、じどうしゃにのりました。

そして、もとのあやしいようかんにかえりました。

とらんくの中にかくれていたぽけつと小ぞうも、そこからでて、ようかんの中へしのびこみました。

うすぐらいうかを、足おとをしをのぼせてあるいききました。

つきあたりのどあがひらいていたので、そのへやへはいつていきました。

へやの中は、まつくらです。かいだんのようなものが、あったので、二だんのぼりました。そのとき、うしろで、がちゃんというおとがしました。

おどろいてうしろに手をのぼしてみると、そこには、てつのこうしがしまっていたではありませんか。

ぱつと、へやのでんとうがつかしました。

「あつ、たいへんだつ」

ぽけつと小ぞうはさけびました。それは、大きなもうじゅうのおりで、ぽけつと小ぞうは、その中へとじこめられていたのです。さつき、がちゃんといったのは、おりのとがしまつたおとでした。

むこうのすみに、一ぴきのらいおんがねそべっていました。

らいおんは、ぽけつと小ぞうがいつてきたのを見ると、ぐうつとくびを上げて、こわ



い目でにらみつけました。

ああ、ぽけつと小ぞうは、らいおんにくわれてしまうのでしょうか。

## 3

ぽけつと小ぞうは、わるもののために、どうぶつえんのおりのようなへやにいれられてしまいました。そのへやには、一ぴきのらいおんがいて、ぽけつと小ぞうのほうへ、のっしのっしとちかづいてきました。こわいめ、とがったきば。

「ぐあつ」らいおんは、ぽけつと小ぞうを、あたまのうえから一のみにしようと思いました。「ううん」ぽけつと小ぞうは、ぱったりたおれてしまいました。すると、へんなことがおこったのです。

らいおんがまえあしで、じぶんのあたまをぐつともちあげたではありませんか。

らいおんのくびがぬけてしまったのです。そのしたから、にんげんのかおがでてきました。にんげんが、らいおんのかわをきて、ばけていたのです。

それは、くろいしやつとずぼんをつけたわかいおとこでした。

「こいつ、きをうしなってしまった。おい、ぽけつとこぞう、しつかりしろ。もう、らいおんはいないぞ」

からだをゆすぶられて、ぽけつとこぞうは、めをひらき、きよろきよると、あたりをみまわしました。

「あつ、おじさんが、らいおんのかわをきていたんだな」

「そうだよ。おれは、どんなにんげんにでも、どんなどうぶつにでもばけることのできるせかい一のめいじんだよ」

「それじゃ、おじさんは、かいじん二十めんそうだな」

「うふふふ……、そのとおりだ。ぽけつとこぞう、よくきがついたな」

「で、ぼくをどうしようというの」

「きみのほかに、こばやしくんも、ここへとじこめるのだ。さつき、きみのぽけつとから、しようねんたんでいだんのぼつじをだして、みちにまいておいたから、いまに、こばやしくんが、きみをたすけにやってくるからな」

「おまえは、ここにはいつていろ」

二十めんそうは、ほけつとこぞうを二かいのへやにおしこめてしまいました。

でも、ほけつとこぞうはへいきです。へやのすみにあったべつどもぐりこみました。

しばらくすると、ほけつとこぞうは、むつくりおきあがりました。まどからでて、となりのまどのしたへいき、なかへはいつていききました。

「いまに、あのほうせきをとりかえてやるぞ」

二十めんそうは、ほうせきのおいてあるへやで、おどがしたので、そつとをあけてみました。

「あつ、ほうせきがない。おかしいぞ。ほけつとこぞうは、へやをでられぬはずだが……」

二十めんそうは、いそいでいつてみました。ほけつとこぞうは、ちゃんとべつどにねていました。

「おい、こぞう」

二十めんそうは、ほけつとこぞうをゆりおこしました。

すると、もうふのなかのほけつとこぞうのからだだが、ぺこんとへこんでしまったのです。

そして、ぽけつとこぞうのくびだけが、ふわふわとうきあがりました。

「あつ、このくびはふうせんだ」

ぽけつとこぞうは、ごむふうせんをふくらまして、じぶんのかわりにしておいたのです。そのふうせんは、にんげんのかおのかたちをしていて、にんげんのようないろがぬつてあつたのです。

## 5

しようねんたんでいだんのひとりが、みちにおちているばつじをみつけたので、ぽけつとこぞうが、二十めんそうにつかまっていることがわかりました。

こばやしだんちようは、三にんのだんいんといっしよに、たすけにきました。

すると、もんのところで、ぽけつとこぞうにいました。こぞうは、二十めんそうのぬすんだほうせきばこをとりかえたのです。

こばやしくんは、すぐに、むせんでんわでけいしちしようへしらせました。

そのしらせで、三だいのぼとろーるカーがかけつけました。

おまわりさんたちは、いえのなかをさがして、三にんのおとこをつかまえました。

「ふしぎだ」

二十めんそうは、どこにもいないのです。いくらさがしてもみつかりません。

しようねんたちがみはっていたのですから、そとへにげだすはずはありません。つかまえたおとこにきくと、

「かしらはまほうつかいだからな。どろんときえちまつたんだよ」とこたえました。

こばやしくんたちは、二十めんそうのへやをさがしました。

「あつ、わかった。二十めんそうは、あそこにいる」

こばやしくんが、だいのうえにすわっているぶつぞうをゆびさしました。

すると、そのぶつぞうは、むくむくとうごいて、いきなりにげだしました。そして、二かいへかけあがっていきます。

「にがすなつ」

みんながおいかけました。二十めんそうはつかまるでしょうか。

## 6

二十めんそうは、金いろのぶつぞうにばけて、二かいのへやへにげだしました。二かいのやねの上は、たいらになつていて、小さな小やがたつていました。

二十めんそうは、二かいからはしごをのぼして、そのおくじょうの小やへにげこみました。

こばやしくんたちが、おいかけてのぼっていくと、「あつ」たいへんです。おくじょうに、一だいのヘリコプターがあるのです。

二十めんそうは、すばやくヘリコプターにのつて、もう、プロペラをまわしています。ヘリコプターは、すうつとそらへのぼっていきます。

それを見ると、こばやしくんは、むせんでんわで、けいしちようのなかむらけいぶにしらせました。

なかむらけいぶは、すぐに、けいしちようのヘリコプターを、げんばへとばしました。

こばやしくとポケット小ぞうは、それにのせてもらい、二十めんそうをおいかけます。そらの大きようそうです。こちらのヘリコプターはすごいはやさでおっています。

とおくのそらに、てきのヘリコプターが、ぽつんとみえてきました。

それが、だんだん大きくなり、二十ぶんほどのうちに、とうとうおいついてしまいました。

むこうのヘリコプターの中に、二十めんそうがみえています。

こちらのほうがはやいのですから、もう、にがすしんぱいはありません。どこまでも、うしろからついていけばよいのです。

やがて、ふじ山<sup>さん</sup>が、大きくみえてきました。二十めんそうは、ふじ山のうらのほうへまわっていきます。

それから、たくさんの山の上をとびました。

二十めんそうのヘリコプターは、あぶらがなくなつて、だんだんおそくなり、とうとう山の中へおりてしまいました。それをみて、こちらも、ちやくりくしました。さあ、どうなるでしょう。

二十めんそうは、ヘリコプターでにげましたが、山の中でつかまって、とうきようへつれもどされ、けいしちようにいれられてしまいました。ほうせきは、ポケット小ぞうが、とりかえしておいたので、じけんはおわたたかのようにみえました。

ところが、それからふつかめに、たんでいじむしよのこばやしくんのところへ、へんなでんわがかかってきました。

「おれは二十めんそうだ。わつはは。きみたちのつかまえたのは、おれの手下てしたさ。ヘリコプターにのるまえに、いれかわつたのさ。

ぶつぞうのきものを手下にきせて、おれは、おしいれにかくれたのさ。だから、けいしちようにいるのは、おれの手下だよ。わつはは。

これから、なにをやるか、みてるがいい」

こばやしくんは、びつくりしてしまいました。

そのあくる日のまよなか。ぎんぎの大きなほうせきやのまどガラスが、ガチャンとわれしました。みせの人が、おどろいていつてみると、ふとい、まっくろな手が、にゆうつとはいつてきて、たくさんのほうせきをつかんでいました。

にんげんの手ではなくて、くろいてつの手です。みせの人たちは、おもてへとびだして



みました。

「あっ」ロボットです。

みせの人たちは、「どろぼう、どろぼう」とさげびながらおいかけました。パトロールのおまわりさんも、いっしょにおいかけました。

人どおりのないぎんぎどおりを、ロボットは、すごいはやさでにげていきます。「あっ」四つんばいになりました。

どうぶつのように、手と足とでかけていくのです。よこちようにまがったかとおもうと、ぱつとみえなくなっていました。

いくらさがしてもみつかりません。みんながかえってしまつと、よこちようのマンホールのふたがもち上がり、中からあのロボットがかおをだして、にやつとわらいました。さあ、どうなるでしょう。

## 8

それから一月ひとつきのあいだに、とうきようのほうぼうで、たくさんのほうせきがぬすまれ

ました。みんな、あのロボットがぬすんだのです。ある日のひるまのことです。

ロボットは、とうきようタワーのちかくのいえにしのびこんで、ほうせきをぬすもうとしたところをみつかつてしまいました。そして、おまわりさんにおいかけられたのです。

ロボットは、とうきようタワーににげて、けんぶつ人<sup>にん</sup>にまじってしまいました。

ちようどそこへ、こばやしだんちようとポケット小ぞうが、あそびにきていました。

ふとぎがつくと、けんぶつ人の中を、へんなやつがあるいているのです。

「こばやしさん、あいつ、へんだね。ロボットみたいだよ」

「あつ、そうだ。二十めんそうのロボットだ」

ふたりが、ロボットをおいかけだしたので、けんぶつの人たちも、そろそろとついてきました。

そこへ、おおぜいのおまわりさんたちが上がってきたので、こばやしくんは、ロボットのことをしらせました。

それから、てんぼうだいは大きすぎです。けんぶつ人でいっばいで、なかなかみつかりません。そのうちに、ロボットのすがたが、どこかへきえてしまいました。

そのとき、てんぼうだいのまん中のドアがひらいて、かかりの人がとびだしてきました。

「たいへんだあ。あやしいやつが、エレベーターで上に上がっていった」

けんぶつ人は、びっくりしてしまいました。てんぼうだいより、ばいもたかいところにある、さぎようだいへにげていったのです。

タワーの下のひろばは、二十めんそうがにげこんだというので、くろ山やまの人ばかりです。そのひとたちのあいだから、「わあっ」というこえがわきあがりました。おお、ごらんなさい。ロボットは、さぎようだいでて、タワーのてっぺんへのぼっていくのです。そこから上には、エレベーターはありません。

せまいてつばしごをよじのぼって、とうとう、タワーのてっぺんまでのぼってしまいました。そして、かた手でてつぼうにつかまり、かた手をひらひらうごかして、下のけんぶつ人をばかにしています。

二十めんそうのロボットは、あんなところへのぼって、どうしようというのでしょうか。

## 9

おまわりさんからしらせをうけて、けいしちようのヘリコプターがとんできました。そ

して、とうきようタワーの上をぐるぐるまわっています。

そのとき、すごいことがおこりました。タワーのてっぺんにいた二十めんそうが、手をはなして、そらへとびたつたのです。

二十めんそうは、フランス人じんがはつめいした、そらのとべるきかいをもっています。はこのようなものをせなかにつけると、それについているプロペラがまわるのです。それをどこかにかくしておいて、いま、からだにつけてとびたつたのです。

まるで、にんげんのかたちをしたとりのようです。そんなにはやくはありませんが、ふわわと、とうきようこうのほうへとんでいきます。

ヘリコプターは、すぐおいつきました。そらの上ですから、つかまえることができせん。ただついていくだけです。

もう、うみにでました。二十めんそうは、だんだん下へおりていきます。その下には、一そうのモーターボートがまちかまえていました。

二十めんそうの手下がうんてんしているのです。二十めんそうは、モーターボートにのってしまいました。

ヘリコプターからのむでんで、水すいじょう上じょうけいさつのランチが、ぜんそくりよくでやって

きました。おまわりさんが、六人のりこんでいます。さあ、大きいようそうです。白しらなみを  
けたててにげるモーターボート。おいかけるランチ。ランチのほうがはやいので、すぐお  
いつきました。

モーターボートは、もう、にげるのをあきらめたのか、きかいをとめてしまいました。  
ランチは、それによこづけになって、三人のおまわりさんがのりこんでいきました。

そして、二十めんそうと手下のおとこをつかまえました。そのとき、びっくりするよ  
うなことがおこりました。

おまわりさんたちは、二十めんそうと手下をたかくもち上げて、くるくるとふりまわし  
ているのです。

それは、ようふくとにんぎょうのかおとぼうしだけで、中みのにんげんは、どこかへき  
えてしまっていたのです。

二十めんそうは、いったい、どこにかくれたのでしょうか。

二十めんそうと手下は、うみの中へとびこんだかもしれないというので、たくさんのランチをだしてさがしました。でも、どうしてもみつかりません。

こちらは、こばやしくんとポケット小ぞうです。

「ねえ、こばやしさん。二十めんそうは、ふねに、アクアリングをよういしておいて、それをつけて、とびこんだのかもしれないね」

「うん、きつとそうだ。アクアリングなら、いつまでもうみの中にかくれていられるからね。よしつ、だんいんをあつめて、ぼくたちもうみにもぐって、二十めんそうをさがすのだ」

こばやしくんは、しょうねんたんでいだんいんのうち、およぎのうまい三人にでんわをかけてよびあつめました。みずのくん・いのうえくん・木きのした下くんです。

みずのくんにいさんが、とくべつじかけのアクアリングをふた二くみもっているのです、それをかりてくるようにたのみました。

しばらくすると、こばやしくんとポケット小ぞうと三人のだんいんは、モーターボートをかりて、とうきょうこうへのりだしていきました。

やがて、二十めんそうのボートのつかまったあたりへきました。

すぐそばに、おだいばがみえています。

このおだいばがあやしいのです。

五人は、ボートをおだいばへつけました。こばやくんとみずのくんが、アクアリングをつけて、うみの中にとびこみました。そうして、すこしやすんではまた、とびこんでいきます。

こうして、おだいばのきしを、ぐるっとまわっていくのでした。このへんのうみのそこは、ごみがいっぱいでもろぶかいのです。どろの中から、いろいろなかいそうがはえていて、ゆらゆらとうごいています。

こばやくんとみずのくんは、うみのそこをおよぎまわりながら、ときどき、そばへよって手をにぎりあいます。

すると、アクアリングにしかけたでんわのせんが、手のひらでつうじあって、はなしができます。

「みずのくん、あそこにあやしいほらあながあるよ。いってみよう」

「うん、いってみよう」

ふたりは、おだいばのきしにちかづき、ほらあなにはいろうとしました。

ふたりは、なにをみたのか、ぎよつとしたように、いわかげにかくれました。まっくらなほらあなのおくに、おそろしく大きなものがうごいていたのです。ふたりが、じつとみつめていると、その大きなものは、ぬうつとでてきました。ながさが六メートルもある、まっくろな、くじらの子どもみたいなものです。

大きい二つの目が、じどうしゃのライトのようにひかっています。

「あつ、わかった。せんこうていだつ。

二十めんそうは、小さいせんこうていをもっているんだ。

あいつ、この中にかくれていたんだな」

こばやしくんは、こころのなかでさげびました。

そして、いそいで、みずのくんの手をにぎりました。さあ、どうなるでしょう。

## 11

こばやしくんは、せんこうていにおよぎついて、そのせなかに上のぼりました。そして、せなかにもり上がっているまるいガラスの中をのぞきました。



すると、中に、にんげんのあたまがみえました。二十めんそうです。ふたりはガラスをへだてて、五十センチぐらいのところ、おそろしいかおでにらみあいました。

たしかに二十めんそうだとわかると、こぼやくんとみずのくんは、うき上がってボートに上りつき、みんな、おだいばに、じょうりくしました。

せんこうていのかくれていたほらあなは、きつと、おだいばの上にいり口があるとおもったからです。

さがしてみると、それらしいあながみつかりました。

ぼうぼうとはえたくさの中に、石をつんでつくつたいどのようなあながあったのです。

「ポケットくん、はいつてみたまえ」

こぼやくんにいわれて、ポケット小ぞうは、まっくらなあなへはいつていききました。すこしたつと、はいだしてきて、「たしかに、下のほらあなにつうじているよ」といいました。

それから、みんなはモーターボートにのって、水上けいさつへいそぎました。そして、いまのことをしらせると、おまわりさんたちは、ランチに大きなコンクリートのかたまりをたくさんつんで、おだいばへむかいました。

みんなのモーターボートも、そのあとについていきます。

こぼやくんたちだけが、おだいばに上って、せんこうていのかえってくるのをまっています。

「かえってきたよ。いま、この下にいるよ」

ポケット小ぞうのしらせに、こぼやくんは、手のしんごうで、そのことを、うみにいるけいさつのランチにしらせました。

すると、ランチは、うみのそのほらあなのそばへすすんで、おまわりさんたちは、コンクリートのかたまりをうみの中へおとしはじめました。

そして、ぜんぶおとししまうと、コンクリートがつかさなって、ほらあなをふさぎ、せんこうていは、でられなくなってしまうました。

さあ、ふくろのねずみです。

おまわりさんたちも、おだいばにじょうりくして、くさの中にすがたをかくし、二十めんそうがあなからでてくるのをまっています。

すこしすると、あなの中から、ぬうつと人のかおがあらわれました。

二十めんそうです。それにつづいて、手下たちもできました。

おまわりさんとこばやしくんたちが、ぱっとたち上がってとびかかりました。

二十めんそうは、すばやくみをかわしてにげまわり、なかなかつかまりません。

そのとき、むこうのくさの中から、むくむくと、ふくれ上がってくるものがありました。さあ、いったい、なんででしょう。

## 12

こばやしくんやポケット小ぞうやおまわりさんたちは、おだいばのくさむらで二十めんそうをおいかけてましたが、うまくにげまわるので、つかまりません。

二十めんそうは、がけつぷちにたつて、わらいだしました。

「あははは。おれはつかまらないぞ。いつも、おれには、おくの手があるからな。

おい、あれをみろ。あそこに、かいぶつのうごいているのがみえるか」

二十めんそうにいわれて、そのほうをみると、人よりもたかくのびたくさむらの中に、大きな、はいいろのたこにゆうどうのようなものが、むくむくとふくれあがっていました。

あれは、いったいなんだろうと、みんなおどろきました。

そのはいいろのものは、みるみる大きくなつて、すうつと、くうちゆうにうき上がりました。それは、五メートルぐらいの大きなたまです。

たまの下に、なわばしごのようなものが、ぶらりとさがっています。

二十めんそうは、ぱつとかけだして、そのなわばしごとびつきました。

それは、大きなふうせんだったのです。

二十めんそうは、こんなときのように、くさむらの中に、ふうせんと、すいそガスのポンプをかくしておいたのです。さつきから、手下が、ふうせんにガスをいれていたのです。大ふうせんは、ふわふわと、そらたかくのぼっていきます。

「どうだ、おくの手がわかつたか」

二十めんそうは、みんなをみおろして、からからとわらいました。

ふうせんは、なぜにふかれてりくのほうへとんでいくので、みんなは、ランチでりくにもどり、れんらくしておいたけいさつのじどうしゃにのつて、おいかけました。

ふうせんは、にしへにしへとながされて、よこはまのまちをとおりこしました。

よこはまからすこしいった山の上に、コンクリートの大きなかのんさまが、にゆうと、くびをだしていました。

ふうせんは、だんだんしぼんで、そのかんのんさまの上におちていきます。  
みんなは、じどうしやおりて、その山にのぼりました。

「あつ、あそこにいる」

二十めんそうは、大かんのんのかたの上によこたわっていました。  
きでもうしなったのか、みうごきもしません。

「よし、こんどこそ、にがさんぞ」

おまわりさんのひとりは、ながいはしごをかりるために、山をかけおりていきました。  
さあ、二十めんそうはつかまるでしょうか。それとも……。

## 13

おまわりさんが、まちへおりていって、でんわをかけました。

しばらくすると、ウーウーというサイレンのおどがして、しょうぼうじどうしやが、山  
へのぼってきました。

ぐんぐんのびたはしごが、大きなかんのんさまのかたとどきました。ひとりのしょう

ぼうしが、それをかけのぼっていきました。

二十めんそうは、かんのんさまのかたに、ぐったりとよこたわっています。

しょうぼうしは、二十めんそうをつかまえました。

あつ、どうでしょう。つかまえた二十めんそうを、いきなり、下へなげだしたではありませんか。みんなは、そこへかけよりました。

「あつ、またにんぎょうだ」

二十めんそうは、いつのまにか、にんぎょうといれかわって、じぶんはどこかへにげてしまったのです。

いくらさがしてもみつからないので、おまわりさんもしょうねんたちも、ひきあげました。

だれもいなくなったあとに、こぼやくんとポケット小ぞうが、くさの中にかくれて、じつとまっています。

すると、むこうの木のしげみがガサガサとうごいて、ひげだらけの、こじきのようなおとこがあらわれました。

「あいつ、きつと、二十めんそうがへんそうしているんだよ。さあ、あとをつけよう」

ふたりは、おとこのあとをつけました。

山をおりて、まちのほうへあるいていくと、はやしの中に、一けんふるいせいようかんがたっていました。

これも、二十めんそうのかくれがかもしれません。

「ぼく、中のようすをさぐるから、きみは、けいさつにしらせてくれ」

いわれて、ポケット小ぞうは、いきなり、まちのほうへかけだしました。

こばやしくんが、へやからへやへとさがしていると、どこからか、へんなこえがきこえてきました。

「こばやしだな。まっていたぞ。おれは、どこにでもかくれがをもっている。ここもそうだ。だが、ようじんしないと……」

そのこえがきえると、ゆかが、ぱつと二つにわれて、四かくなあながひらきました。

こばやしくんは、ドスンとコンクリートのちかしつにおちこみました。ひどくこしをうって、おき上がれません。

そのとき、ドドドドドのものすごいおとがして、コンクリートのかべのまるいあなから、水がたきのようにおちてきました。

水ぜめです。ああ、こばやしくんは、どうなるでしょう。

## 14

かべのあなから、水が、おそろしいいきおいでながれこんできます。

はこのようなコンクリートのちかしつですから、水はたまるばかりです。

三十センチ、五十センチ、一メートル。もう、水が、こばやしくんのむねまでできました。かべには、なんの手がかりもないので、よじのぼることもできません。

いっぼう、ポケット小ぞうは、まちのけいさつしよにかけつけていました。

二十めんそうをおいかけたおまわりさんたちは、一ひとやすみしていました。ポケット小ぞうのはなしをきくと、

「それっ」

といて、みんなじどうしやにのり、はやしの中のようかんへいそぎました。

ちかしつでは、水が、もう、こばやしくんのくびまできました。それから、あごまで、口まで、はなまで……。



いきができないので、およぐほかありません。

「ははははは。きみは、およぎがうまいね。まあ、ゆっくりおよいでいるがいい」  
てんじょうで、ひげもじやのかおがのぞいています。

おまわりさんをのせた二だいのじどうしゃは、ぜんそくりよくではしっていききました。  
ポケット小ぞうは、うんでんだいにつて、みちあんないをしています。

はやしがみえてきました。

「あつ、あそこです。こばやしさんがしんぱいです。

いそいでください」

「うふふふ。さつきから、ずいぶんおよいだね。いったい、きみは、どのくらいおよげ  
るんだね。つかれないかね」

てんじょうのあなから、ひげもじやの二十めんそうがからかっているのです。

こばやしくんは、すっかりつかれてしまいました。

もう十ぶんもすれば、ちからがなくなっておぼれしぬかもしれません。

「どうだ、こんどこそおもいしらせてやるのだ。ふふふ。くるしいか、かわいそうに、な

きべそをかいてるな」

そのとき、へんなことがおこりました。

いままで、わらっていた二十めんそうが、

「わあっ」

と、ひめいをあげたのです。上では、ボタン、ボタンと、とっくみあいのはじまったようです。

二十めんそうは、いいきになっていたので、おまわりさんたちのきたのにきがつかなかったのです。そして、とうとうつかまってしまいました。

「ごばやしさん、二十めんそうはつかまったよ。いまたすけるからね」

ポケット小ぞうは、げんきいっぱいさげびました。

# 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第21巻 ふしぎな人」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年3月20日初版1刷発行

底本の親本：「たのしい一年生」講談社

1959（昭和34）年11月～1960（昭和35）年3月

「たのしい二年生」講談社

1960（昭和35）年4月～1960（昭和35）年12月

初出：「たのしい一年生」講談社

1959（昭和34）年11月～1960（昭和35）年3月

「たのしい二年生」講談社

1960（昭和35）年4月～1960（昭和35）年12月

※底本は、連載の回数を見出しとしていきます。

入力：sogo

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かいじん二十めんそう

## 江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>